

曾野綾子集

現代文学の実験室④

曾野綾子集

定価五〇〇円

昭和四十四年十月二十五日 初版発行

著者 曾野綾子

発行者 北内正男

発行所 株式会社 大光社

東京都新宿区新宿三の四三

電話 (二三六) 六六五一

© 1968 Ayako Somo

印刷
検査

印刷・曇平印刷 製本所・篠原美術
乱丁落丁はお取り替えます。

現代文学の実験室④

曾野綾子集



大 光 社

現代文学の実験室

曾野綾子集
目次

9 地球のかぐわしい部分

75 百済観音

105 颯颯

143 一円をわらう者は

169 生甲斐

193 墮落教師

343

解説―鶴羽信子

339

あとがき

313

只見川

251

ただよう小舟

223

胡桃

デザイン 代田 奨
表紙写真 学習研究社提供

曾野綾子集

地球のかぐわしい部分

一

今から十年ばかり前、緒方恭一は、東京都下の郡部のH町のH小学校に入学した。

父はH町役場の吏員であった。晩酌に毎晩一本ずつ飲むのを楽しみにしていたが、決して酒乱ではなかった。

恭一は母に揃えてもらった、新しい服を着、学用品を持って初登校した。今でこそH町のあたりは、農家が耕地を宅地に転用して巨額の現金を握っているが、その頃はブームも始まりかけで、農家の子供もまじるH小学校の中では恭一の服装はかなり整った方だった。

恭一はその頃はかなり腕白な子供で、学齢に達する前から、家の附近の野や川を跋渉ばつしょうしていた。母親にパンを買いにやらされた帰り道にあちこち道草をくい、肝心のパンをどこへ置いて来たものかどうしても思い出せず、叱られて泣く泣く、自分が立ち寄ったあらゆる場所を探し歩き、ようやく鎮守の森で見つけた時には、すでに野良犬が、焼きたてのパンの匂いを嗅ぎつけて、紙包を食い破った後だった。

だから、恭一は、一年二組の中に、自分より少し体格の大きい、赤ら顔をした少年がいても、初めは気にもかけてはいなかった。

その子は服装から見ても、農家の子供とはどこかしら違った。今にして思えば、恭一と同じよう

な、小市民的折り目正しい服装だったのだろうが、恭一の第一印象は、そんなことではなかった。

一年生の席順はすでに机に名前を書いた紙がはってあって決っていた。恭一の隣が例の赤ら顔の少年で、つかもぎ司繁つかもぎという名前であった。

恭一と司との関係は、席について数分後に始つたのである。

恭一が手をほんの少し、司の机の方に出していると、彼はいきなり、自分の領土をおかした手を厳しく払いのけたのであった。

恭一は呆氣にとられた。しかし小学校一年生の子供は、言葉によって、相手の真意を確かめる、という方法を知らなかった。恭一はなぜ、それほど、相手に掌をはらわれなければいけないかを確認するために、もう一度、指先を、ほんの一、二纏ヤシほど、司の机の方にわざと出して見た。すると司が数秒間、それをじっと見ているのがわかった。司の顔は樽柿のように赤くなった。

しかし彼が次の行動にはでないで、恭一がそれみろ、と思いながら、幾分相手に気を許した瞬間だった。

突然、再び恭一の手は目にもとまらぬ早さで払いのけられ、その上に今度は、ぱしっと彼の目から頬にかけて何か生ぬるい液体が飛んだ。

先生も周囲にいた父兄も誰一人として気づかない。うったのは司の手ではなかった。彼は爬虫類のような比類ない正確さで、恭一の顔に唾をはきかけたのである。

驚きが先に立って、恭一は声をあげることもできなかった。恭一も敵をやつつけるかなりのワザを心得ているつもりだった。後からくみついたり、木に登ったり、竹林の中を敏捷にすりぬけたり……。しかし、これほどの決定的な鮮かな技術は見たことがなかった。恭一は手の甲で、臭気のひどい毒液のような司の唾を拭った。

しかし、これは司繁の乱暴のほんの序ノ口でしかないことが、間もなく組中、いや学校中にひろまった。ほんの一週間ばかりのうちにであった。

初め司は、ポケットに手をつつこんで、仲間が遊ぶのをじっと見ていただけで、決して自分から入ってくれと、言葉をかけなかったが、おいくらまんじゅうをして自分が円の外に押し出されるや否や、突然、近くにいた女の子をひきずり出して、その首筋をひっかいた。

只のひっかき傷ではなかった。三本の傷が深い輪だちのあとのように見え、皮をひきむいて、更に肉までも、掘りおこされたような傷だった。驚いた女の子が、それほどの傷を受けながらも、ショックで泣きもしなかったのも、恭一の場合と同様だった。

女の子はすぐに、受持の先生に病院へ運ばれ、放課後になって、恭一たちの部屋には、地味な和服を着た、瘦せた女の子が現われた。

その女が、病院から帰って来た学校の先生の前にうなだれて坐り、傍に真赤な顔をした司をひきすえているところから、恭一はそれが、司の母親だろうと思った。

大人たちは、部屋の隅に残っていた恭一を、子供として無視していたが、実は恭一には大人の言葉はほとんどなかったのだった。

「できることなら、私はこの子と二人だけで、どこか山の奥へでもひきこもってしまいたいと思っております」

女の人は言っていた。薄い雀斑そばかすのういた顔に、長い睫毛まつげが、涙で濡れて、恭一はその横顔を美しいと思った。司は母が、敵の前に屈したのに、腹をたてているようだった。

「実の親の私でさえ、扱いかねておりましたんですから、学校がよく、これで六日でもお預り下さいました、と思ひまして……」

恭一はひそかに司の屈辱を思つて同情した。

「いや、学校としては、別に迷惑ということはありませんが」

しかし、先生は、本当は言葉通り迷惑しているのだった。そこで先生は恭一を見つけるとほっとしたようにつけ加えた。

「あそこにいるのが隣の席にいる緒方君ですが、別にいじめられているという気配もありませんし」「本当に、そうであつてくれれば、と存じますが」

「腕力をふるわれるような、何か理由が思い当られますか。小さい時病弱で、うんと甘やかしたとか……」

「いいえ、主人は、むしろたった一人の息子でもございますので、厳しく育てるように言っております」

「お父さんは、お勤めですか」

「はあ、主人は軍人でございましたが、終戦後は、何か働かなければなりませんので、知り合いの方のやつておられます銀座のゴールデン・スタアというキャバレーの経営をお手伝いしております」

恭一の記憶している大人たちの会話はそれだけであった。

一カ月ほどで、司の戦法は一応、子供たちの間に知れ渡った。

唾を吐きかける、それからひっかく、最後が咬みつくのである。

「俺にさわった奴は咬むぞ」

と司が叫ぶと、女の子は、黄色い叫び声をあげて虫けらのように逃げ出す。司の顎の力は異常で、単に歯をたてるというのではなく、咬みついたら最後、上下の歯の力で、体中ふりまわされても、食いついている、といった種類のものではあった。

男の子たちも、次々と被害に会った。司が食いついた時、彼の鼻柱を、ドアの取手でもひねるよう力一ぱいねじること、顎の力を弛めさせる、という方法は恭一が発明したものであった。しかしそういう恭一も、何度か、スキを狙われた。彼は傷を家へ帰ってかくすようにしていたが、たまには母に見つかることもあった。